

高浜中学校区

「宮川」地名のおこり

地名としての「宮川」はミヤカワと発音して地形上、川が貫流していたと思う。宮川神社が伊勢神宮と関連した設立の話が伝わっているのでミモス川は上流をミヤカワと呼ばれていることからミヤカワと呼ばれたと思う。

宮川の経塚

宮川の裏山に経塚と呼ばれる土地がある。経文を書いた石が沢山出たことがある。石の文字はこすっても水で洗っても消えなかった。

宮川、宇佐美家の家宝

宮川の宇佐美さんは上杉謙信の軍師であり重臣として名をなし、晩年謙信の為に、上田城主長尾政景を野尻湖で舟遊びにかこつけて、相抱いて沈み謀殺したことで有名な枇杷島城主宇佐美駿河守定行、その定行公の子孫で貞之という方なのだ。宇佐美さんにはその遺物が家宝として沢山ある。それが今学校の児童博物館に寄付して下された遺物である。

竜泉寺の天神講

二月二十五日は天神講といって菅原道真公の命日で皆が集ってお祭をする日である。天神様を信仰すれば勉強がよく出来るというので参詣者は皆一心になっておまいりをして菅公のお話を聞いて社領から上った天神米で赤飯をたいて皆でいただくのである。昔上杉景勝という人が天神様へ寄付した田を社領と言っている。

その昔承久の乱において人皇第八十五代の帝でおいでになった順徳上皇は承久三年七月某日佐渡へ御流遷の折この地に御休息なさること七日、七日目の夜霊夢をごらんになり、この地は最もあらたかな地であるというので菅公御直筆の金泥経文並びに一尺三寸（四十cm）ばかりの御自画像とを当山に安置なされたと伝えられている。これが天神社の御神体である。特に霊験あらたかであるとして、大聖威徳天満大自在天神と称し奉り古来王侯の尊崇あつく慶長三年上杉景勝公天神米を寄進した。当社は龍泉寺の丘にある。

宮川神社と義経公

都から奥州下向の義経は一人の老翁に宮川のいわれを詳しく尋ねられた。その昔延暦年間藤原政信と言う人が伊勢の国宮川から内宮天照大神をおうけ申してはるばる千里の海路を越えてここをお通りになられた時、不思議なことに向うの山の頂に靈光がきらめいた。

政信は非常に心をうたれてこの湊に船を寄せその靈光のあらわれたところを向山と名づけそのほとりにお宮をたてて御神体をお移し奉った。そして当社を神明宮と申し、またこの駅を宮川と言うようになったのである。こうした老翁の話をつくと聞いておられた義経はこゝまで来る途中幾多の恐しい災難にあった時自分は心中常に伊勢皇大神を祈願し奉り幸に神明の加護によって無事災厄をまぬがれることが出来たので有難いこととお礼を申し上げさせて戴こうと当社へ参詣なされ幣帛を奉りなお続く奥州下向の旅も無事であるようにと祈られたという。幸に義経等の祈願は神のおぼしめしにかなったのであらう。つつがなく秀衡館へ到着することが出来たので、義経はそのお礼として亀井重清をつかわされ本殿花表御橋にいたるまで建立されたという。

法華沢

今から凡そ七百五十年昔北条時頼將軍のころ日蓮は幕府の怒りにふれて佐渡へ流された。師思いの弟子達は日蓮上人の膝下を離れては全く生きている心地がしないで何とかして師のおそばに行きたいものと思つておつたが警備のために如何とすることが出来なかった。しかし高弟の日明は何とかして会うだけでも会いたいものと思ひ、文永八年、年の暮雪がしきりと降る中を遠路はるばる北陸道を通り佐渡にいる日蓮上人に会いにこの高浜海岸、当時の間道を通つてひそかに今の学校の北方に当る御堂に三、四日雪の止むのを待つて滞在したという。このいわれで、この御堂のあつた場所を法華沢

と名づけた。

宮川の清水不動

高浜町宮川の清水不動は町の北方榎樹下にあり、この辺はもと荒地であつた。某なるものこの地を開拓し良田を得ようと欲したけれども水がなかつたので椎谷に行つて不動滝に沐浴し、不動尊に夢にてお告げあらんことを祈ると一夕水出るとの夢を見た。そこで勇躍奮起して良田を開き榎樹の下を掘つたところ果して水を得た。そこで自分が信仰した不動尊一体を椎谷の不動堂主に願つてこの地に勸請安置し、清水不動尊と称し崇敬したという。現今では宮川北部の人々はこの水の性質佳良なるを以て汲み飲料水に供しているという。

椎谷の殿様

椎谷中央の丘の平地こそ堀公一万石の陣屋の跡である。今は稻荷神社と石碑とがわずかに古を物語るばかり、この地前面は日本海を控へ眺望佳なる上椎谷町を眼下に見渡され藩侯居城の地としてはまことに最良の境たるを思わる。旧藩士の人々により建立せられた丈余の碑がある。その篆額は正三位子爵奥田直紹公の染筆にかかり文章は結城琢氏の撰である。一読して歴代藩士の功績歴然たるものがある。

初代直之公は羽柴秀治に仕え秀治亡んでから徳川氏に仕え、慶長、

元和の役の軍に従った。大阪道明寺の役に先鋒となって勇を奮って進み手ずから一敵將の良く戦う者を切った。しかし、そのだれなのかを知らなかった。明くる年幕府は大阪城を修理した。公はその工事を監督した。時に一老婦あって、人を遣わし問うていうには「某は故大阪方の將、薄田兼相の母である。往年の戦に我が子は公の手にたおれたと聞く、願わくばその時の最後の有様を詳しく聞かせて欲しい」と、公その時の様を告げ始めて先に切ったところの者は兼相であったことがわかった。幕府はこれを聞いて越後刈羽郡の地を加え賜って更に前功を賞した。薄田兼相とは岩見重太郎のことである。

椎谷の椿米

柏崎の納屋町にある穀倉へ納める堀候領米、苞中（つとのなか）には必ず椿の葉一枚を入れて置いたという。

椎谷の馬市

椎谷の馬市は古いもので元和年間から行われているという。当時の殿様が非常に馬をお好みになり種馬の飼育に力を注がれた。その結果馬市が生まれ椎谷と言えば馬市、馬市と言えば椎谷を思い出す程盛んになってその範囲も奥州南部と遠い地方の人々が出入りして盛んな時には町には数千頭の馬が売買されたという。そして特によ

い馬には殿様からほうびとして鈴をいただきまたどんな荒馬でもならされるといふ意味でか、ここへ来た馬は全部観音様のお札をいたでけることになっていたという。

そのころは海岸もずっと広く馬小屋が沢山ならび今でも馬止の杭が海の中に残っていて昔の盛りを思わせるものがある。

七月一日は椎谷市で昔の馬市の名残をとどめている。

王神様

椎谷のかみのはずれに道まで突き出ている赤土の山がある。昔この山の頂きに寒川大神をお祀りした王神様のお社があった。この神様が御自分のお力の思うようになるところから、いたずらをされて沖を通る船を動けなくなることが度々あった。船頭たちは大変困って、どうぞ通らせて下さいませ。とお祈りしたら、ようやく動けるようにして下さったという。

こんな事があったので町の人達は相談して、社が海に面しているからこんなことになったのだ、よそへお移ししようということにきめて少し奥の大きな森の中へ社を立てた。この森を王神森といって屋なお暗いほど大きい樹がたくさんあった。靈験あらたかであられたこの神様を信仰して氏子は自分達の住んでいる町内を王神町と言って今なお、春秋二回のお祭は氏子によって盛大に行われている。

鉄扇花

出雲崎築種屋内藤三右エ門方蘆は書の上で亀田鵬斎、谷文晁等と親交があった。

生来、草花を愛し長崎へ行った帰りに珍らしい鉄扇花という草花をはるばる椎谷の峠まで持って来たが、ふと観音坂上で同じ花がらんまんらんまんと咲いているのを見て故郷にもこの花があったかと遠く三百里外より数日間苦勞した愚を嘆じ海中に投げ捨てたという。

文化十二年八月二十六日遠逝行年五十七才。

椎谷の馬盗人

水戸黄門光圀公は越後の有名な椎谷まで来ると馬市に出会して泊る宿屋もないという始末、幸い椎谷の在所の百姓屋の好意で主従三人、わらじのひもをといた。何にせよ一万余頭の馬が狭いこの宿に詰め、そのため人家の三分の二は諸国から集ったばくろばくろうと馬の宿になつてしまふ。光圀は百家の馬を借りて市を見に行くと一人の乞食が「人通りの激しく通り切れぬからその馬の尻に乗せてくれ」と頼むを光圀が許したところ途中で乞食はがらりと様子を變えて、光圀に「降れるこの馬はわしの馬だ」といい掛りをつけて大騒ぎとなり代官所へ出頭して代官の榎原平馬が裁きをつけたという。

椎谷の観音様

今から千二百年も昔のこと椎谷の海に不思議な光が輝いた。村人たちは何事であろうかとたくさん舟を漕ぎ出して、その光を目がけて網を打つと海の底から一体の観音様が現われた。村人たちは大変有難く思つて山の上に小さな御堂を造つて、その観音様をお祀りした。それから約八百年も後のこと寛永元年の冬、吹雪の晩一人の旅の山伏が御堂に泊り火事を出した。村人が驚いて山の上に飛んで来て火を消しながら本尊さんを探したがとうとう見つからなかった。本尊さんは本堂に焼けてしまったであろうか。そのころ佐渡宿根木村に丸山治久と言う人がいた。最早五十才になるのに子どもがない。そこではるか海を隔てた椎谷の観音様を信仰し、なにとぞ男子を授けて下さいと一心にお願いし観音様のお告げを蒙つて可愛らしい男子を授かった。治久夫婦は大変喜び名を忠三郎とつけて大切に育てた。忠三郎は世にも稀な天才兒で僅か二才三才で立派に読み書きが出来た。ところが忠三郎が七才の正月十七日別段苦しむ様子もなく眠るが如く息絶えて死んで仕舞つた。御両親の歎きは一方ならず泣く泣く葬式を営むことになった。時にお母さんが今一目我が子の姿を見たいものと御棺の蓋を取ると、御棺の中に忠三郎の影も形もない、大変不思議なことに思った。忠三郎さんの死骸はどこへ行つたのであろう。

さて、忠三郎さんが死なれた前夜椎谷観音堂の住職の夢に観音様が現れて「我は佐渡の丸山治久が切なる願ひに答えて一子忠三郎と

なつて生まれたが今また帰る時節が来たので当山へ帰るであらう」といふお告げがあつた。住職は大変有難いことに思つて夜明けを待つて山に登り再建された御堂を開いて見ると実にお告げ通り昨日までおられなかつた本尊様が七年前の御姿でお立ちになつておられた。まことに世にも珍らしい靈仏である。

観音堂の黒絵馬

観音堂の宝物殿に畳二枚位の大きさの馬の額が奉納されている。この絵についてこんな話がある。

この絵馬が本堂に挙げてあつたころ六月も下旬、麦のみのころになると毎夜の如く畑を荒すものがあつた。何者のしわざかなかなかわからなかつた。ある夜、村人が大ぜい畑にひそんで待ち構えていると黒い怪物が現われて、作物を片端から食べはじめた。皆で取り囲んでつかまえようとすると、一頭の黒い馬が一散に山をかけ下りて逃げてしまった。追いかけてお堂の境内に來ると、とうとう姿を見失つてしまった。疲れたので本堂の中に入り休んでいるうち、夜が白々と明け始めたのでふと見上げた眼に黒馬の絵馬がうつつた。いつもある絵馬ではあるが気のせいか動いているように思われてならない。よくよく見ると足に土がいつぱいついていたので、さてはこの馬が飛び出しては畑を荒すのにちがいないということになつたが、さて、どうしたら出ないようになるかわからない。村の主だちが集つていろいろ相談したが、良い知恵が浮かばないで困っているところへ、一人の画書きが通りかかりこの話を聞いて私が出ないよ

うにしてあげようと言つて、たづなと二人の馬丁を書きそえた。それから後は畑を荒すものがなくなつたという。

椎谷観音竜灯樹

観音堂の境内に天を突くような松の太木があつた。

八月九日は九万九千日といつて、この日お参りすると九万九千日お参りしたと同じ御利益があるといふので、近郷近在の者が日の暮れないうちからお参りに來ておこもりをする人が多い。

真夜中になると佐渡の沖の方から龍灯という不思議な光が渡つてきて、あの松の木の頂きにとほされたという。そこでこの松の大樹を龍灯樹というようになった。

弘法大師と不動尊

第五十代の桓武天皇の延暦二十三年に僧空海は、はるばる海を越えて遠い遠い唐の国へお渡りになつた。そして彼の国の恵果和尚について深い研究をつまつた。やがて再び日本へ帰ろうとなされた時、恵果和尚の言葉に依るには「万里の海を越えて旅する時には必ず不動明王のお力におすがりせよ。そうでなかつたなら、つつがなく船路を終ることはむずかしいであらう」とお教えになつた。そこで空海は師の言葉に依り先ずその身を淨め心を淨めて後、一寸八分（五、五cm）の不動尊を彫刻なされることになつた。敬けんな氣持で

日夜刻まれて、いよいよ木彫りの不動明王は出来上った。そして恵果和尚より開眼加持を受けて船中の守本尊として無事日本へお帰りになった。昔、弘法大師が諸国を行脚なされた時、この地方をお通りになり海近くまた山近く物静かな山際の椎谷の地に不動様を安置することになった。弘法大師はしばらくこの地にお止まりになったがある時夜明けの霧があたり立ちこめている朝突然不動明王が滝の中にその姿を消してしまわれた。この時からこのお滝のことを身隠しの滝というようになった。その後信州高梨の城主信濃守の子孫で義則という人が武者修行の時この地で重い病にかかり不動様の霊験によって全快して以前にも増して健康な体となった。そこで旅をやめて御堂を修理し髪をそり不動明王のためにその一生を捧げられたという。

頓入沙弥

正明寺部落に巻口清八という男があった。身丈六尺余大力無雙で乱暴者であった。村人にけんかを売っては酒代をまき上げたりして近郷近在のきらわれ者であった。ある祭の晩村人達がいつものように酒によって眠っている清八を縄でしばって池の中に投げ込んだ。しかし不思議に命を助かった清八は椎谷の観音堂に行つて髪をそり名を頓入と改めた。彼はここに來て「ああ、ここが靈驗あらたかな観音堂か。だが何と険しい坂道であろう参詣者はさぞ難渋されていることだろう。よし私の一生を捧げて沢山の人々の難儀を救つてやろう。せめて過去の罪はろばしに」と固く心に誓ったのである。そ

れからは彼は托鉢の帰りに海から重い石を運んで石段を築き始めた。北海独特の恐ろしい吹雪、どしゃ降りの雨、息もつまるような中で黙々と働き続けた。時々村人が出かけて來て頓入さんを助けてやろうとしたけれども頓入さんは「お志は誠に有難いがこの仕事は私人の力でやり通すつもりです。人間の心がどこまで砕けぬものかそれを知りたいのです」ときっぱり断った。かくして十八年の努力が遂に三百段の石段を立派に築いたのであった。頓入さんはこの大事業が終ると自分で掘った洞窟の中に入られお経を唱えながら御入定なされた。石段の中腹に頓入沙弥入定の窟と石碑が建っている。今から二百年昔のことである。

朱印塚

観音堂裏山の通称堂山に二つの大きな塚がある。昔から言い伝えでこんな歌が残っている。

朝日射す夕日輝く木の本に漆千杯朱千杯

御膳水

明治十一年九月十四日のこと明治天皇北陸御巡幸のみぎり、椎谷にお休みになられた。お宿は羽田車屋であった。天皇様に差し上げるお茶の水を不動様の境内にこんこんと湧き出ている清水を汲んで來て差上げた。とてもおいしい水で天皇様は御満足なされお立ちに

なられた。そこでこの井戸をお茶水の井戸と名づけ今も美しい清水が過ぎ去った光栄の日をなつかしんでいる。

漂流の道標

文政十年暮れのこと、椎谷の浜に柱のような一本木が漂流して来た。上部にこぶしのような刻みがありその下に「娥眉山下橋」の文字が刻まれてある。村人がわいわいさわいでいる所へ西禅院の坊さんが通りかかった。坊さんにも何の意味かわからなかったが「娥眉山」という名は知っていた。椎谷の殿様の耳に入り所蔵することになった。揚子江上流幾百里、これから左へ進めば娥眉山下の橋に達するの標であろうということに決った。

今は高柳町村山家に保存されてあるという。

「不知落幾年代 書法温雅且清新

分明娥眉山下橋 流寄日本椎谷浜」

良寛の詩といわれるが真偽の程はわからない。

大古塚

椎谷観音坂の路傍に「大古塚」がある。里人の伝えに永正七年六月上杉顕定、長尾為景の両軍が当地で激戦の時、討死の兵卒数百人をここに大穴を掘って敵味方を分たず武器帯剣の儘、合せ埋めたという。

今なおこの辺に枯骨、刀槍土中に累々とあるという。時に元龜三年七月二十三日魚沼郡妻有莊大井平村金子の城主小田海之助、当観音堂へ参詣の折、古戦場を見、靈魂を痛まれ、その辺八宗の僧侶数百名を請じ大法会を営み塚上に記念碑を建立したという。

絶景坂

景勝の地として世に知られているものは決して少ないとは言わない。けれども雄大で幽えんな自然美を寸眸の中に収め得る椎谷北方の切り通しこそ、いわゆる絶景坂としてすぐれた眺望をもつ地であろう。絶景坂の名は明治十一年九月十四日明治天皇北陸御巡幸のみぎり、しばらく御車をここにとどめさせられて、つくづく御覧あらせられた後「ああ、絶景よ」と仰せられたことから始ったものだという。弥彦角田の靈峰が青くそびえ立ち夢の佐渡ヶ島が水平線上に浮んでいる。また北海岸には石地寺泊の漁村が小松の多い丘を背にして遠く近く連っているのが手にとるように見える。四時折々の風情をもって絶景坂の眺望は郷土第一の美観であらう。

響山

椎谷の北に観音堂があり、海岸の眺めをはじめ大変景色のよいところである。

麓の海にひたる所に「千畳敷」という広い岩に毎春遊び客がこの

岩に集って酒宴を催し歌を歌うと響山が答え丁度二ヶ所で遊ぶと同じ感じがする。これは伊勢国市之滝の「おうむ石」というところにもこの様なところがあると伝えられている。

椎谷の天狗窟

椎谷の天狗窟は観音岬の道下にある。昔、観音像をこの地に安置した時、どこより来たものか多くの天狗が集って来た。観音山は場所が広いから天狗の住家には不足はない。ある年の夏天狗どもが海水浴を始めたが浜辺には脱衣する所がない。また遊ぶ地もない、そこで毎夜来ては遊覧場を造った百畳敷もある広い窟を築き上げた。そこで天狗窟と名づけたのであるという。

机立の観音

椎谷の町を北へ行くと観音岬を切通した坂がある。その坂の麓に人家が数軒ある。ここが坂の下であってそこに小さな御堂がある。私どもは「坂の下のお観音様」または土地の名が机立なのでこのお堂を「机立の観音」と言っている。

今から凡そ千三百年前第四十六代孝謙天皇の御代に泰澄大師という人が国上寺宝塔の妖怪呪縛のためこの地をお通りになったそうであるがその時、ここにお泊りになってお堂を建てられたのだと言われている。その後大永年中に長尾為景と高梨摂津守とがこの地で戦

った時、兵火のため残らず焼けてしまったそうである。
今のお堂はその後寛政十三年三月に再建され今日に及んでいる。
本尊は十一面観音であって比喩渴磨（ひづかつま）の作ったものであると言われている。なおこのほかに木喰上人が作った十三仏像が安置されている。

